



第64号

編集室 〒794-2114
愛媛県今治市吉海町
名2916-2 高龍寺内
TEL 0897-84-2129
FAX 0897-84-4495
Eメール chiho@mg.pikara.ne.jp
責任者 鴨井 智峯

新年のお慶びを申し上げます 高龍寺院家

天皇陛下の生前退位は二百二年ぶりのことでしたが、平成から令和に変わった時、明るい御代替わりで天皇陛下は賢明な判断をなさったと多くの国民が歓び、時代が変わったと実感しました。しかしその明るい令和元年から、この令和二年の様変わりを誰が想像したでしょう。

正体の見えない疫病に不安を感じなかった人はいないと思いますし、私個人に一番衝撃的だったのは、タレントの岡江久美子さんの死去でした。私とほぼ同年代の方ですが、お別れも許されず、遺骨が入っているとさえ思えないようなバッグに収められた遺骨が自宅の玄関先に置かれ、その後、ご主人の大和田獏さんが玄関先のお骨を持ち上げる映像は、人と人との別れも出来ない社会になると感じました。

今は三次感染拡大し、一向に収まる気配は見えませんが、しばらくはコロナが世の中にある中で生きていくしかありません。

人と人が自由に会い集えることへの有難さをしみじみと感じるこの頃です。

どうぞウガイと消毒マスクを徹底し、自分の身をお守り下さい。

合掌



ドローンを飛ばして高龍寺を撮影しました。この写真なら、新しくなった屋根の様子をご覧いただけます。檀家の皆さまに感謝いたします。

うるう年について 副住職 鴨井悠真



「うるう年にお墓を建ててはいけなかったと言われたのですが、どうすれば良いですか？」と聞かれることがございます。この話は昔から伝わっておりますが、気にする必要はございません（どうしても気になる場合は、命堂という代理のお墓を作り、年が明けるまで待つ、という方法もあります）。なぜこんな話が広まったのかというと、新暦と旧暦とでうるう年の事情が変わるからです。

旧暦は月の満ち欠けで季節の流れを判断する、というものです。月はまず新月から満ちて満月になり、そこから欠けて新月に戻ります。およそ29.5日かけて新月から新月へと変わるのですが、この期間を1か月と名付けたそうです。そしてこれを12回繰り返せば季節がほぼ一巡することに気づき、1年は12か月と決められました。

しかし、29.5日を12回では354日にしかならず、季節と暦にズレが出てしまいます。季節というのは太陽と地球の位置関係が決まりますから。そこで3年に1回、1か月を追加することでこのズレを解消しました。つまり旧暦の頃はうるう年は1か月もあったのです。それだと農家が大変です。一か月増えても収穫が増えるわけではありませんから。そこで「うるう年には金額の大きい買い物は控えましょう」という考えが広まったそうです。元々は買い物全体を控えましょう、という話だったのですが、それがいつのまにか、お墓限定のお話になってしまいました。

なのでお墓を建ててはいけなかったというのは、当時の経済的な理由から生まれた話であり、宗教的な意味はありません。

お墓を建てたいけれど、うるう年の話で悩んでいるという方は、この話を踏まえてご家族とご相談してみてください。

人は忘れられても死なない

高龍寺副住職 鴨井悠真

「全く覚えのない人の位牌が見つかったのですが、この人の位牌も祀ってあげないといけくないのでしょうか？」と聞かれることが時々ございます。

確かに顔も名前もわからない人をご先祖様と言われても実感がわきにくく、仏壇に残し続けることに納得しづらいかもしれません。

「人は忘れられたときに死ぬ」という言葉を最近の映画やドラマでよく聞きますが、本当にそうなのでしょか？

檀家さんたちの反応を見てみると、良い人ほど早くに忘れられることが多いように感じます。思い出話をしようとしても「あの人は良い人だったね」で終わってしまうからです。

逆に「あいつには酷い目に遭わされた、ロクでもない奴だった」という話は、たとえ何年、何十年経っても忘れられることはありません。

しかしそんな理由で覚えてもらっても、それは「死んでいない」と言えるのでしょうか？

「命がけて人命救助をした」や「事業が成功し大きな会社を設立した」という素晴らしい話はいつまでも人々の記憶に残り続けます。しかし、そういった逸話が無くても素晴らしい方は大勢いらっしゃいます。

つまり「うちの御先祖様にこんな人いたっけ？」と言われるのは、華々しい成果を挙げるからこそ叶わなかったものの、誰かを傷つけ

ることも無く、まじめに精一杯頑張って生きたことの証だと言えるのではないのでしょうか。

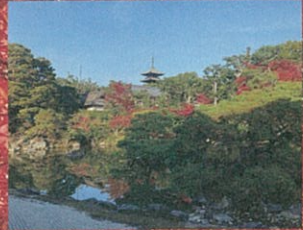
もちろん亡くなった方のことをいつまでも覚えていてくださるのとはとても素敵なことですが、大勢いるご先祖様の中で忘れられる方が出てしまうのは仕方のないことです。しかし、そういった方たちの頑張りのおかげで今の私たちがあるのだと思います。

お家に残っている古いお位牌たちも、どうかいたわりの意味も込めて、大事にしてあげてください。



仁和寺の秋

撮影 高龍寺住職 鴨井 智峯



仁和寺での生活も四年任期の最終年を迎えることとなりました。毎朝国宝の金堂で六時からの勤行と法話を勤め、季節が変わりゆく中で、秋の境内を撮影してみました。